



緑 蔭

Yuin

北海道大学附属図書館報

目 次

○なんとなく、図書館 大里外誉郎…………… 1	○「北海道大学附属図書館 将来像検討委員会」発足…………… 9
○資料保存。さて、つぎにどうするか 二宮嘉須彦… 2	○研修・講演会等…………… 9
○次世代大学図書館を展望するシステム— カーネギー・メロン大学図書館訪問記 永田治樹… 5	○図書館資料の不用決定について……………10
○第2期週及入力5カ年計画発足…………… 8	○電算化部会ニュース……………10
○CD-ROM マルチ検索システム導入…………… 9	○会 議……………11
	○本学教官著作物……………13
	○人 事 往 来……………14

な ン と な く、図 書 館

医学部教授・図書館委員会委員 大 里 外 誉 郎

昭和20年の8月に戦争がおわり、占領軍が日本にやってきた。仙台にもたくさんのアメリカ兵が進駐して、米軍のための諸施設を作るのに日本人のアルバイトが雇われた。中学生の私も、放課後夜おそくまで方々で働いていた。

そのなかの一つに CIE 附属図書館があった。CIE とは Civil Information & Education の略で、アメリカ軍の日本向け教育機関である。大きな建物のなかに本箱を運びこんだり、本や雑誌を並べたりした。出来上がった図書館はそれは快適で、日本人にも開放されたので、私は毎日出かけて夜おそくまでぶらぶらと過ごした。もっとも、親切なアメリカ人館員が、どういう本を読みたいのかと、チンプンカンプンの英語でたずねてくれるのには閉口しましたけどね。

ここの図書館にはいろいろと楽しい企画があった。あとで役に立ったのは、英会話教室と、料理はでなかったが洋食のたべ方を教わったこと。クイズ番組もあった。一等になるとチョコレートやパンがもらえた。当時日本人はだれもが飢えていた。レーズン入りのパン、こんなにおいしいものがあったのかと、大感激したのである。

時は移って昭和37年、CIE 図書館(その頃はアメリカ文化センターと名前がかわってい

た)には大学にない外国雑誌がいろいろあったので、相変わらず出かけていた。パラパラとページをめくっていたら、ウイルスによって細胞が試験管の中でがん化する、という論文が目に入った。当時、日本のウイルス研究者は、がんウイルスというものがあることを、ほとんど知らなかった。大学院を出たばかりでインフルエンザウイルスの研究をしていた私は、たちまちこの新しい分野のとりこになり、翌年アメリカで、動物のがんウイルスの研究を始めた。そうして一年たった頃、そこの図書館でたまたま拾い読み中、これまた exciting な論文に行き当たった。アフリカの子供のがんに未知のウイルス粒子を発見した、というものである。これが、最初のがんウイルスの登場であった。以来20余年、私はヒトのがんウイルスの研究に従事している。

結局私の場合、CIE に始まってなんとなく図書館と出会い、そこでの拾い読み、browsing を通じて進む方向が決まったことになる。図書館に足を向けては寝られないのである。

最近の図書館は大変便利である。そこが知りたい、と思えば、compact disc (CD) に整然と満載された情報を、開けゴマ、と唱えて自由に引き出すことが出来る。機械オンチの私も、機械とお友達になりたいと、つねづね思っている。でも、紙の本が図書館から消えて、CD ばかりになったらどうしよう、browsing もままならず、と寝ながら考えていたら夢をみた。CD から色々な情報が、図書館の中のいくつかのテレビにゆっくりと流れて何人かその前で眺めているのである。もっといい夢も見たように思うが、どうも思い出せなかった。

翌日、新着の雑誌をパラパラ見ていたら、92 歳の方の随筆がのっていた。年をとると、面白い夢を見てもすぐに忘れてしまう。夢のビデオが発明されないものか、と書いておられる。なるほど、奇想天外な夢物語が、色鮮やかな laser disc で図書館中を飛びかえれば、何か画期的な研究の構想が湧いてくるかも知れませんね。

〈HINES 図書館公用掲示板紹介〉

是非「読む」に設定しておいてください。

「o. library」

これは図書館の公用掲示板です。図書館利用者へのお知らせを掲載します。開館時間の変更や行事など図書館の利用案内、HINES 利用者へのシステム利用案内などを随時掲載します。

「o. library. reference」

これは書き込み自由の掲示板です。文献や事柄についての問い合わせなどを送っていただきたいと思って開設した掲示板ですが、これにこだわらず、図書を紹介・書評・購入希望の図書などの「投書箱」として使っていただいて結構です。

資料保存。さて、つぎにどうするのか

日本図書館協会資料保存委員会委員長 二 宮 嘉 須 彦

このあいだの北海道大学附属図書館講演会では、「資料保存の現状と課題」と題した講演をさせていただきました。北海道内の図書館のみなさまに、資料保存の話ができる機会をあたえてくださいましたことに、感謝いたしております。

日本の資料保存の現状について、つぎのふたつをまとめた話をいたしました。ひとつは、酸性紙問題の警鐘から10年が経過したいま、資料保存にかかわってきた人たちのあいで、どんなことが共通に確認されてきたのかということでした。つまり、酸性紙本はどうしてうまくいかなかったのか、どんなしくみで本が崩壊していくのかということ。それと、おもに大量脱酸が中心になってしまいましたが、酸性紙本を救うのにどんな手だてがあり、いまどんなようすなのかということでした。ふたつは、より永く本をもたせるための注意。ともすればみおとしがちな、本（資料）のとりあつかいとケアについて、スライドとともに説明いたしました。

当日はどちらかというと、「現状」の説明におおくの時間がとられてしまいました。あまり「課題」についての話ができませんでしたので、ここで補足したいとおもいます。

* * *

図書館の現在と未来の利用者にたいして、確実な利用を約束するいっさいの手だてが、資料保存です。ですから、その手だてのなかには、本に直接手をくだす修理や修復もはいるますし、とりあつかいかたや書庫の温湿度管理といった間接的な手だてもふくまれます。酸性紙本を脱酸処理して、いまより劣化がすすむのをくい止めようとする手段も、有力な手だてのひとつです。だがどうも、期待されているわりには満足いく結果がえられないようですし、脱酸処理の効果じたいに疑問ももたれています。

ところで、酸性紙による劣化本の数がしだにおおくなってくると、1冊ごとの修理や修復には限界がでできます。ただ、日本の図書館には、欧米ほどめだつた劣化本の数がないからでしょうか。資料保存というと、本をどう直していくのかという修理方法に、もっぱらの関心がむいてしまうようです。途方にくれるほど大量の劣化本をまえにしたら、とても1冊単位でどうするかといった発想ではとらえられなくなります。劣化した本を、群れとしてとらえるやりかたで処理する発想に、かえていくことになります。酸性紙本問題が日本の図書館で、衝撃的につたえられたわりにはピンときていないのは、現物を目のあたりにした危機を感じるのがすくないからかもしれません。しかし日本でも、ゆるやかですが確実に、本が劣化しつつあるのはたしかです。

では、どうすればよいのか。そこの図書館で、できることからはじめていくよりほかありません。図書館としてはまず、本の命をできるだけばしてやる手だてをおこなうことです。ひとつには環境の整備、もうひとつはケアとハンドリングです。

つまり、本にとって、いごちのよい環境をととのえてやることです。それはどうじに、なにが本にとっていごちがよいのかを、図書館がかんがえることでもあります。環境の改善は、酸性紙本の劣化速度をおそくする効果が期待できます。劣化をすすめる原因が、酸加水分解や紙の分子間の水分不足ですから、湿気や異常な乾燥をさけてやれば、それだけ劣化のすすみかたはゆるやかになります。光や熱、歪みなどの力がくわわっているようなら、とりのぞき

ます。できるだけ、劣化の要因をすくなくしていきます。たとえば、近代設備のひとつである空調にも、疑いがもたれています。はたして一日のうちで、また年間をとおした温湿度がどれほど変化しているのか、その幅が問題になります。みじかい期間での、おおきな変動がよいのです。それを知るには、整備調整された計器で、継続した測定をつづけていきます。図書館はもっと敏感に、本がおかれている場所の温湿度変化に、関心をもつひつようがあります。

書庫というおおきな環境のなかに、本ごとのちいさな安定した環境をつくることもできます。1冊ごとに中性紙でできた入れ物、「容器」にいれることです。この「容器」はねだんも安く、図書館員がかんたんにつくることができます。大量に処理をしなければならないときや、建物の環境にあまり期待できないような図書館には便利です。崩壊してしまった本をそのままのかたちで残すときにも、この「容器」は味方になります。ただ「容器」にいれさえすれば、それで資料保存がすんだわけではありません。本によっては終着の場所でもあるこの「容器」は、そこの図書館が資料保存のつぎの段階へうつるまでの、いわば時間かせぎのようなものです。

もうひとつの、できるところからはじめられる資料保存に、ケアとハンドリングがあります。第77回全国図書館大会・資料保存分科会で、資料のとりあつかいについてのアンケートがとられました。集計結果をみますと、図書館の本の破損のほとんどが、とりあつかいの悪さからきていることがわかりました。どちらかという本のとりのあつかいは、あつかう各自の良識にまかせられていた部分でした。しかしアンケートの数字は、良識というあいまいさでは、本の傷みが救えていないことをしめています。もっとも、よく「本をたいせつに」といわれますが、それでは具体的にどうすれば本にとってよいのかは、はっきりしていませんでした。本にとってのいごちのよさだけでなく、どちらかといえば、いごちの悪さをみていくひつようがあります。はやく、大枠としてのとりあつかい基準を、つくらなくてはなりません。それには、どうして壊れてしまったのかを知るとともに、本をこう無理にあつかうとこんな壊れかたをするのか、といった製本の知識が図書館員にもとめられます。また、とりあつかいの悪さは利用者にかぎりません。図書館員にたいしても、よりきびしいとりあつかいかたが要求されます。

* * *

Conservation と Preservation ということばがあります。日本語ではいずれの訳も資料保存です。はじめは欧米でも、両方のことばの意味はかさなっていたようです。最近では、とくに図書館資料保存がらみでつかわれるときに、おたがいのことばの輪郭というか境界がはっきりして、ちがうつかいかたをするようになりました。Conservation はおもに、保存の技術的な手だてからとらえた資料保存。Preservation は、その上位概念にあたります。図書館でおこなう資料保存の計画や立案、予算がらみの配慮、館員や利用者にたいする保存教育もふくめた政策的な手だてをいうときに、このことばがつかわれます。

たしかに資料保存の技術的な対応は、日本では急速に浸透しました。欧米にくらべても遜色ないすすみかたでした。おおくを外国に学んだからでしょうか、むしろ技術面での試行錯誤がすくなかっただけに、資料保存の理解と対応はすんなりとひろがったようです。ただ、このところ、このふたつのことばを比較しながら気になることがあります。すんだのは技術的な手だてのほう、つまり Conservation であって、図書館が図書館として大枠をしめすひつようがある Preservation は、はたして進展しているのだろうかという不安です。たしかに、酸性紙とはどういったものかとか、救う技術にはどういうやりかたがあるかについては、たえず紹

介や論議がされています。しかし、図書館にとってそれらはいずれも、資料保存の基礎的な知識がわかりやすくまとまったことと、本を残すための技術的な選択肢がふえたことにすぎません。図書館が資料保存をおこなうには、共通の知識にうらづけされた、その選択肢をえらびとるにたりる判断が基本になければなりません。どうもそのところが、まだ日本の図書館ではっきりしていないようです。

資料保存について「共通にこれだけ確認できた」「保存技術は、ある」と、ここまではいきました。「では、つぎにどうするか」。この問いが、日本の図書館にとっての、資料保存の課題といえます。

* 「課題」について、図書館にかかわる問題点とともに、「本はどうして劣化するのか」「本を救うにはどうすればよいのか」のまとめは、拙論「資料保存 図書館の問題点提起のために」(「専修大学人文科学研究所月報」第145巻 1992)を一読されたい。

* このアンケートの集計については、以下に報告が掲載されている。参考にされたい。

日本図書館協会資料保存委員会「ネットワーク資料保存」第32号 1992. 1,「図書館雑誌」Vol. 86, No. 3, 1992

(編集部注：平成3年度北海道大学図書館講演会でご講演いただきましたことに関連して、二宮様からあらためてご玉稿をいただきました。)

次世代大学図書館を展望するシステム— カーネギー・メロン大学図書館訪問記

(東京大学附属図書館情報サービス課長)
(前北海道大学庶務部研究協力課長) 永 田 治 樹

空港から通じたフリーウェイのトンネルを抜けると、アレゲニー川とモノンガヘラ川が合流しオハイオ川となるゴールデン・トライアングルの光景が一挙に開けて、映画「ブルーベルベット」などで見覚えのある巨大な橋やスカイスクレパーがいくつも目に入る。ピッツバーグは、大変美しい街だ。以前は鉄鋼の街だったが、ハイテクシティとして蘇り、現在全米で5番目に本社が集積するという。鉄鋼王カーネギーによって1900年に設立され、時の流れで今はハイテクシティの頭脳の一つとなっているカーネギー・メロン大学(CMU)を、昨年秋本学の国際交流事業基金の援助で西村(工学部)・袴田(経理部)両氏とチームを組み訪問した。コンピュータ・サイエンスの分野では世界的に名声の高いCMUは、学生数7千足らずの大学なのに、この大学は外部より導入される資金額が常に全米大学のトップ・トゥエンティに入り、また学内の50以上のLANを連結し数百のファイル・サーバー、数千台に及ぶワークステーション等のコンピュータ資源をネットワーク・サービスに統合したアンドリュースシステム(Andrew System)を構築するなどその先見的・個性的な大学運営に興味をそそられたのである。めざすは研究協力の部署とアンドリュースの管轄部署であった。

しかし彼の国においても見も知らぬ者には返答をよこさないケースはあるとみえ、手紙を宛てた研究協力の部署から待てど暮らせど返答がこない。どうにかならないものかと、多少とも「土地感」のある大学図書館に頼んでみた。それでも返事はなく(実は図書館長が私の手紙

と前後して別のところに移っていた), いよいよせっぱ詰まって知人の紹介でお隣のピッツバーグ大学にいる方に連絡し取次を依頼することにしたところ, その直後出発日 2 日前に, ようやく図書館長代理のバーバラ・リチャーズさんから便りが届いた。いわばすべり込みセーフだったが, そんなしだいでもあり, また研究協力の部署への約束は午後でもあったから, この際午前中に斡旋の労を取ってくれた図書館も見学しようと思い立ち, その旨 FAX を送り早朝の便でピッツバーグに向った。

ハント・ライブラリー (Hunt Library) という CMU の中央図書館は, 中位の規模の図書館であった。上記のようなやり取りのせいか, 入口にリチャーズさんが迎えに出て下さっていた。図書館訪問は本務ではない気軽さもあって大学図書館の展開戦略などを話合ったり, また新しい情報検索システムについて担当のキム・ギンター・ウェプスターさんから懇切な説明を受けた。1 カ月後に稼働予定のオンライン利用者用情報検索システム (利用者目録 OPAC を含むもの) を実際にみせていただいたが, その印象を思い起こし CMU における新しい図書館情報システムを簡単に紹介をしておこう。

「米国における電子図書館プロジェクト」(安達淳) (「学術情報センターニュース」No. 18) でも言及されているように, CMU には電子図書館をめざすプロジェクト・マーキュリー (Project Mercury) がある。この電子図書館プロジェクトは, 全文情報の電子ドキュメント・デリバリーサービスをめざすものであるが, 現在その実現のステップとして第 2 次図書館情報システム (LIS II)・高度検索システムの開発が進められている。この計画は, 次のような四つの目標を持っている。

- 1) 第 1 段階では書誌情報の領域の拡大に, 第 2 段階では全文情報デリバリーに焦点を絞って, キャンパスネットワーク上で図書館情報が入手できるようにすること
- 2) 図書の内容についての情報を索引付与や目次情報によって提供すること
- 3) 検索インタフェースの改善及びシステム経費の削減を高機能のワークステーションで実現すること
- 4) 本計画の結果報告書の作成

まず基盤的な仕掛けとしてのキャンパスネットワーク・アンドリューがあり, その上で LIS II は UNIX 型の分散システムとして構築されている。提供される情報は, 上記第 1 の目標のところで指摘されているように, まず書誌情報である。書誌情報という場合, LIS II においてはいわゆる図書館目録のようなものをさすだけではなく, 各種の 2 次情報データベースを含んだ全体であり, また自家製だけでなく商用データベースについても, 利用要求に応じて購入し提供する。

LIS II が提供している 2 次情報データベースは, 磁気テープベースでは INSPEC, そして CD-ROM では, CIRR, Art Index, Compact Disclosure, COMPENDEX, PAIS, COMPUTSTAT, CD-MARC, MathSci, NTIS, CIS Masterfile, Statistical Masterfile, SSCI, Psylit, ABI/Inform, DAI Ondisc, BIP Plus, ERIC などである。これらは概ね主題・分野別の情報をとりまとめたデータベースである。もちろんいわば狭い意味での書誌情報データベースとして, CMU 図書館の所蔵目録情報や CHOICE, それに ISI の CURRENT CONTENTS がある。CHOICE は書評データベースであり, CURRENT CONTENTS は雑誌論文の書誌情報データベースである。

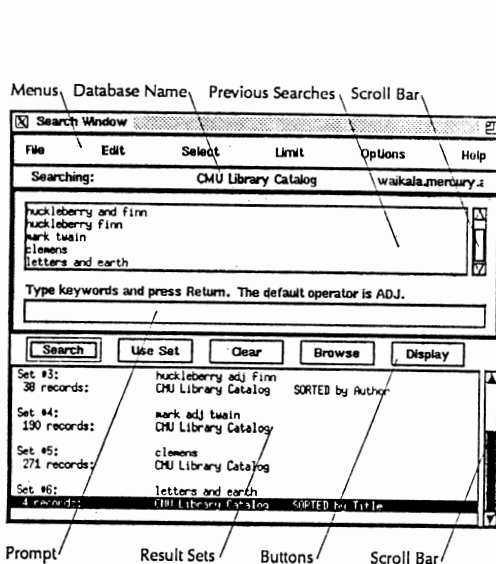
一方, 全文情報などとしては, エルゼビアーやパーガモンあるいは ACM (Association of

Computing Machinery) などと全文情報データベースの受給契約をしている。そのうち ACM からは Computing Literature など四つのデータベースの提供がある。またその他に研究者総覧、学生総覧などのローカルデータベースがあって、これらを提供し、図書館がキャンパスでの情報発信基地となろうとしている。

以上のデータベースの全てを一挙に提供しようとする仕掛けが LIS II の利用者用情報検索システムである。ただし現段階では CD-ROM については、標準やらライセンス上の問題があって、解決されたものから順次ネットワーク・サービスに搭載されるとのことであった。また全文情報については実験の段階である。

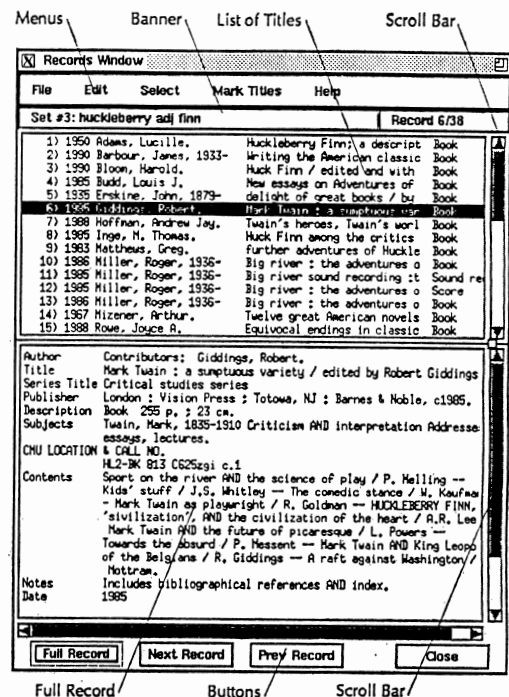
さて、LIS II の検索システムのハードウェアは、標準としてはワークステーションが用いられており、ウィンドウによって複数の機能操作ができ、またアイコン化などの工夫も用意されている。インタフェース・ソフトウェアには、OSF (Open Software Foundation) が作成した Motif が使われている。ネットワーク上の IBM PC、アップル・マッキントッシュなどからは、類似のインタフェースによって操作できる。また検索エンジンは OCLC の Newton が使用されている。

検索作業の流れに沿ってみると、まずこのシステムにログインした後、最初にデータベースの選択がある。オンライン利用者目録 (OPAC) がデフォルトになっているが、もちろん各種のデータベースが選択できる。現在は20ほど用意されているはずである。検索のためにデータベースごとのインデックスもある。検索には、キーワードや ADJ (一連の用語列), AND,



The Search Window

図1 最上段は機能メニュー、その下が選んだデータベース、次いで前に検索した記録があり、真ん中あたりに検索キーワードなどを打ち込むところが見える。下段は検索結果集合の表示で、検索キーワードなどと検索結果の間に検索とか表示とかのコマンドボタンがある。



The Records Window

図2 上段がメニュー、その下が検索キーワードと検索演算子、次の欄にはいわゆる簡略表示が、下段は簡略表示の中で選ばれたレコードの詳細表示である。

OR, NEAR (同一フィールド中の用語), NEARx (NEAR の距離条件), NOT の 6 種類の検索演算子を使うことができる。そして検索結果をのぞくにはディスプレイのボタンをクリックするという手順である。

検索の例示が図 1 及び 2 であるが、この検索インタフェースでは操作の全体がみられて状況の把握ができ、わかりやすい。ここに例示した図は、PC などにエミュレートされた表示イメージであって、ワークステーションや X ターミナルの場合はウィンドウの操作によってより見やすくてできる。またさまざまな利用者へのガイドがみられるが、たとえばこのシステムでは常時トランザクション・ログ、ネットワーク接続状態などをモニターしており、性能を計って利用者が込んでいるときや検索結果が多すぎるときなど別の方法が指示されたり、各種の表示などにも図書館専門用語をなるべく使わないように配慮されている。

この検索システムの主たるウィンドウは、サーチウィンドウ、ブラウズウィンドウ、簡略表示ウィンドウ、詳細表示ウィンドウの四つである。アスキーコードレベルの情報については大方これで表示できるのだが画像情報のためのウィンドウが必要で、イメージウィンドウを開発中で、CCITT の G4FAX のフォーマットを使い、ソフトウェアでデータ圧縮を行うとのことであった。これができれば LIS II の全体が実現されることになる。

LIS II の検索システムをかいつままで紹介してみたが、この検索システムを目にしたときの第一の印象はその情報サービスの統合性とシステムインタフェースの高度な操作性であった。前者は、たとえば書誌情報は入手したが本文入手には別の努力がいるなどというこれまでの図書館情報サービスの非連続的な欠陥を埋める工夫で、まさに今後の展開してゆかねばならない方向であって、おそらく誰もが賛同するだろう。一方後者のインタフェースの問題は、誰にでも使えるインタフェースをという脅迫観念みたいなものがわれわれにはあって、必ずしも全ての同意をえることは難しいかもしれない（初心者インタフェースのようなものの必要性はあるが、とっつきは良いが、これも慣れてしまうとすこぶる不便なものである）。どのようなインタフェースが良いかは、そのシステムの機能や性能にもよるし、また利用者の慣れにもよる。LIS II 検索システムのインタフェースは、システムの機能に比例して高度ではあるが混沌としているわけではない。大学という環境ではこのようなインタフェースが望まれるのだろう。

カーネギー・メロン大学からカーネギー博物館あたりまで帰路、色づいたメイプルを眺めながら、そんな確認やこれだけの情報サービスに対する羨望のようなものが反すうされた。わが国の大学図書館システムといえば、数年前かなりプリミティブな OPAC が導入されたあと、一向に進展しないままである。そろそろ次のステップを踏み出す頃合ではなかろうか。

◎図書目録データベース第2期遡及入力5カ年計画が発足

遡及入力事業の第1期計画が平成3年3月に完了しましたが、引き続いて第2期計画が全学的支援により平成3年4月から開始されました。

現在、北大蔵書約280万冊のうち約60%がオンラインで検索できるようになりましたが、なお約110万冊の北大蔵書がカード目録のままです。

遡及入力の効果は、単に検索のオンライン化、検索方法の一元化にとどまらず、旧蔵資料の掘り起こし作業という意味でも有意義です。したがって、ほぼ全ての蔵書データの入力を最終目標としつつ、とりあえずこの5年を一区切りとして第2期遡及入力事業を計画した次第です。

第2期はオリジナル入力を中心となるので要員の教育、データの品質管理作業等、第1期にくらべて困難な作業となりますが、利用者の期待と関係者のご協力にこたえるよう一層の努力を重ねたいと思います。

第2期の入力対象図書 (DB未登録図書111万冊)

北大図書データベース未登録図書のうち、全学的利用度、入力効率、遡及データの必要性を考慮し、附属図書館および人文社会系部局の図書資料のなかから約11万冊、自然系部局の図書約5万冊、合計約16万冊を第2期の対象としています。

◎CD-ROM マルチ検索システムが導入されました。

これは複数の利用者が同時に、しかも HINES 経由で部局図書室等から複数の CD-ROM 検索 (マルチ検索) できるという画期的なシステムです。

関係者の多大なご尽力で HINES 時代にふさわしいサービスを提供することになり、この誌上を借りてお礼申し上げます。

提供予定のデータベースは、MEDLINE (1985 年以降) と BIOSIS (1991 年以降) です。

現在システムとその運用方法は確定していませんが、決定次第 HINES の図書館公用掲示板 o. library で速報いたします。

◎「北海道大学附属図書館将来像検討委員会」発足

当館では現在、図書業務のあり方、建築・施設について見直しをすすめているところですが、今般、全学の図書系職員による標記委員会を発足させました。メンバーには若い職員が多く参加しています。長期的展望にたった斬新で活発な議論と綿密な調査による具体的方策の提言 (報告書) が期待されます。

委員名簿: 石黒克介 (総括: 情報サービス課長), 宇野弘純, 山口國雄, 矢野誠, 新岡弘, 片山俊治, 佐藤依理子, 吉竹忍, 岸本一志, 午来信子, 田中健太郎, 三橋修, 金子敏, 竹鼻敏治, 鶴沢和往 (以上附属図書館), 伊藤秀治 (教育学部), 山下洋一 (薬学部), 中条将喜 (文学部), 石丸恵 (理学部), 金子和恵 (医学部), 富本寿子 (歯学部), 松尾博朋 (工学部), 佐々木圭 (農学部), 坪田千江子 (環境科学)

なお、ここでの検討内容のいくつかは、HINES の f. librarian で紹介します。

◆ 研 修 (図書館業務関係分)

○総合目録データベース実務研修 (平成3年第1回, 学術情報センター)

平成3年9月30日(月)~10月26日(土) 於: 学術情報センター

受講者 山口國雄 (附属図書館目録情報掛長)

◆ 講演会等

○北海道大学図書館講演会 (平成3年度)

平成3年12月5日(木) 於: 附属図書館大会議室

「これからの大学図書館」 京都大学教育学部助教授 原田 勝氏

「資料保存の現状と課題」 日本図書館協会資料保存委員会委員長 二宮嘉須彦氏

「雪氷と人間」 北海道大学名誉教授 (前低温科学研究所所長) 若濱五郎氏

○附属図書館講演会

- 平成4年2月7日(金)

「CD-ROM マルチ検索システムの構築とその運用」

群馬大学附属図書館情報管理課図書館専門員 橋本登美雄氏

- 平成4年2月13日(木)

「情報化社会における大学図書館の役割」

図書館情報大学事務局長 田中久文氏

- 平成4年3月6日(金)

「東北大学図書館における今後の図書館情報処理システム」

東北大学附属図書館情報管理課システム管理掛長 佐藤義則氏

- 平成4年3月11日(水)

「ドイツにおける大学図書館の現状 (文部省在外研究報告)」

名古屋大学附属図書館情報管理課課長補佐 牧村正史氏

- 平成4年3月16日(月)

「CD-ROM と新しい図書館サービス」

東京工業大学附属図書館情報管理課システム管理掛長 大原寿人氏

◆ 図書館資料の不用決定について

榆蔭第80号(平成2年7月)で通知のとおり第143回図書館委員会において「北海道大学附属図書館における図書館資料の不用決定及び廃棄に関する処理要領」が承認された。

今回の作業は、この要領第2の(1)「保存を要すると認められた正本を除いた複本」に該当するものに限定して行った。具体的には、図書館書庫5,6層に所蔵する和洋雑誌のうち、重複してかつ利用状況からみて複本を必要としないものを対象とした。第146回及び第147回図書館委員会で、不用決定の対象とすることが承認された第1期第1次分197誌1,975冊及び第2次分595誌6,063冊について不用決定がなされた。これらのうち大部分の資料は、主として道内の国立大学図書館に管理換されることになっている。

◆ 電算化部会ニュース

○サービスシステム運用部会

: 平成3年度第1回 (平成3年6月20日)

- 本館書庫資料のオンライン貸出開始のため、簡略書誌マスタから所在情報が「北大蔵書」となっている分を削除することを要望する。

- CLARK システムのサービス時間延長について

システム管理部会に延長にあたっての問題点の調査と実現に向けての対応策の検討をシステム管理部会に要望する。

- 他部局所蔵の資料を求めて訪問するときに携行するための「資料調査票」を作成する。

: 平成3年度第2回 (平成3年7月30日)

- ILL システムについて

- 現物相互貸借の要項作成について

: 平成3年度第3回 (平成4年3月5日)

- ILL システムについて

- HINES での無手順検索サービスについて

○図書管理システム運用部会

: 平成3年度第1回 (平成3年6月18日)

- CLARK システムのサービス時間延長について

- 納入者コードの追加登録について

- 他大学等への管理換にともなうシステム上の対応について

○目録情報システム運用部会

: 平成3年度第1回 (平成3年6月13日)

- CLARK システムのサービス時間延長について

: 平成3年度第2回 (平成4年1月30日)

- 分類適用表の DC 20 版への切り替えについて

○雑誌情報システム運用部会

: 平成3年度第1回 (平成3年6月20日)

- CLARK システムのサービス時間延長について

○システム管理部会

: 平成3年度第1回 (平成3年6月25日)

- 簡略書誌マスタから所在情報が「北大蔵書」となっている分を削除する。

- システムサービス時間の延長について

MT カートリッジ自動装填システムの導入等、実現への機器設置、環境整備について図書館に要望する。

◆ 会 議

第 146 回 図書館委員会 <平成 3 年 7 月 4 日 (木)>

(議 題)

1. 平成 2 年度決算について
2. 平成 3 年度予算 (案) について
3. 第 2 期遡及入力計画について
4. 北海道大学附属図書館貴重図書等の指定及び取扱いに関する要領 (案) について
5. 図書館資料の不用決定について

(報 告 事 項)

1. 平成 4 年度概算要求事項について
2. 大型コレクション (外国図書) について
3. 第 1 期遡及入力について
4. 第 38 回国立大学図書館協議会総会について
5. 経済学部との部分統合の経過報告

第 147 回 図書館委員会 <平成 3 年 11 月 12 日 (火)>

(議 題)

1. 図書館資料の不用決定について

(報 告 事 項)

1. 大型コレクションについて
2. CD-ROM の利用状況について

第 148 回 図書館委員会 <平成 4 年 3 月 13 日 (金)>

(議 題)

1. 平成 5 年度概算要求事項について
2. そ の 他

(報 告 事 項)

1. 平成 3 年度学内共同利用自然系外国雑誌購入費の返戻額について
2. 図書館資料の不用決定について
3. 経済学部図書の移管状況 (中間報告) について
4. CD-ROM マルチ検索システムについて
5. 大学図書館の評価方法設定のためのアンケートについて

第 106 回 教養分館委員会 <平成 3 年 7 月 23 日 (火)>

(議 題)

1. 平成 3 年度教養分館図書予算について
2. 平成 3 年度参考図書・視聴覚資料の選定について

第 107 回 教養分館委員会 <平成 3 年 11 月 5 日 (火)>

(議 題)

1. 教官選定図書について
2. 言語文化部教官等使用済図書・視聴覚関係資料の取扱について

平成3年度国立大学附属図書館事務部長会議 <平成3年5月27日(月)>

会場: 東京医科歯科大学

(議題)

1. 大学図書館の当面する諸問題について

第38回国立大学図書館協議会総会 <平成3年6月27日(木)~28日(金)>

会場: 富山大学

1. 北陸先端科学技術大学院大学の加盟について
2. 週40時間制への対応について
3. 資料の保存について

第24回国立七大学附属図書館部課長会議 <平成3年11月14日(木)>

会場: 京都大学

(協議事項)

1. 図書館資料の不用決定等と図書館資料の受入基準について
2. 完全週休2日制への対応について
3. 週休2日制実施後における図書館サービスのあり方とその対応について
4. 完全週休2日制(週40時間勤務制)への対応について
5. 外国雑誌の契約方法について
6. 週及入力の促進について

第65次国立七大学附属図書館協議会 <平成3年11月15日(金)>

会場: 京都大学

(協議事項)

1. 大学図書館における著作権の諸問題について
2. 今後における大学図書館のあり方について
3. 21世紀をめざした大学図書館のあり方について
4. 大学の自己評価について 一大学図書館における自己評価の在りかたについて一
5. 大学図書館の将来像について
6. エレクトロニック・キャンパスにおける大学図書館の役割について
7. 資料の保存, 特に古典籍の保存対策について
8. 留学生に対する図書館サービスのあり方について

平成3年度国立大学附属図書館事務部長会議 <平成3年11月28日(木)~29日(金)>

会場: 筑波大学

(協議事項)

1. 事務部長会議の機能について
2. 学校週5日制への大学図書館の対応について
3. 事務部長間の連絡網の確立について
4. 海外日本図書館(大学図書館附置)派遣図書館専門員制度の新設について
5. 「日本複写権センター」設立に伴う文献複写について
6. 国立学校設置法の一部改正に伴う図書館側の対応策について
7. 学内LANと電子図書館化について
8. 国立大学図書館における資料保存の対策について
9. 学術情報センターシステムについて
10. 留学生に対する図書館サービスについて

◆ 本学教官著作物 (本館・分館受贈分)

本学教官の方々から附属図書館に下記の著作図書を御寄贈いただきました。

〔本 館〕

○文 学 部

- 今 西 順 吉 漱石文学の思想 第一部・第二部 筑摩書房 1988, 1992
近 藤 潤 一 中世和歌集鎌倉篇 (新日本古典文学大系 46) 岩波書店 1991

○教 育 学 部

- 所 伸 一 ペレストロイカと教育 大月書店 1991

○経 済 学 部

- 浜 田 康 行 金融の原理 北海道大学図書刊行会 1991
中 西 徹 スラムの経済学 東京大学出版会 1991

○法 学 部

- 佐 藤 鉄 男 取締役倒産責任論 信山社出版 1991
酒 井 哲 哉 大正デモクラシー体制の崩壊 東京大学出版会 1992
渡部保夫・木佐茂男・佐藤鉄男 テキストブック現代司法 日本評論社 1992

○農 学 部

- 黒 柳 俊 雄 農業構造政策 農林統計協会 1991

○スラブ研究センター

- 伊 東 孝 之 (篇) The World Confronts Perestroika. SLAVIC RESEARCH CENTER, HOKKAIDO UNIVERSITY 1991
皆 川 修 吾 (篇) Thorny Path to the Post-Perestroika World. SLAVIC RESEARCH CENTER, HOKKAIDO UNIVERSITY 1992

〔教 養 分 館〕

○言語文化部

- 中 野 美代子 龍の住むランドスケープ 福武書店 1991

◆ 人 事 往 来

○配 置 換

- | | | |
|---------|------------------------------|----------|
| 松 井 敏 | 経理部情報処理課第二情報処理掛 (情報管理課会計掛) | 3. 7. 1 |
| 水 野 嘉 永 | 情報管理課会計掛 (医学部附属病院総務課登別分院事務掛) | " |
| 猿 橋 キヨミ | 文学部図書掛 (農学部図書閲覧掛) | " |
| 高 橋 忠 明 | 工学部図書整理掛 (文学部図書掛) | " |
| 山 田 達 雄 | 農学部図書閲覧掛 (工学部図書整理掛) | " |
| 伊 藤 啓 子 | 情報管理課図書受入掛 (獣医学部獣医学科家畜薬理学講座) | 3. 11. 1 |
| 小 峰 邦 夫 | 教育学部図書掛 (情報サービス課相互利用掛) | " |
| 紙 屋 国 夫 | 水産学部図書掛 (教育学部図書掛) | " |

○転 出

- 加 徳 健 三 筑波大学図書館部情報システム課参考第三係長 (水産学部図書掛) "

○採 用

- 金 子 敏 情報サービス課相互利用掛 3. 12. 1

北海道大学附属図書館報「榆蔭」(ゆいん) 通号 83 号

平成 4 年 (1992 年) 4 月 24 日 発行 発行人 附属図書館事務部長 金 井 孝

編集事務 宇野弘純・阿部勝義・黒田泰行・吉竹 忍・片山俊治・佐藤依理子・
松本礼一・斉藤寿美子・坪田千江子・吉田恭子

発行所 北海道大学附属図書館 札幌市北区北 8 条西 5 丁目 716-2111 (2967)

印刷所 文 栄 堂 印 刷 所 札幌市中央区北 2 条東 12 丁目 231-5560・5561